

タクミの絆

こいも
恋下 うらら

青山ライフ出版

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあることをご了承ください。
本電子書籍は、購入者の閲覧目的のためだけに、ファイルの閲覧が許諾されています。

目的を超えた転載、配信、送信などの行為は著作権法上、禁じられています。

第一章 立夏編

栗毛色に浮んだぼっかりした雲が、はるか遠くまで広がっている。

夕暮れの日の光が、窓から刺し込んできた。

窓を開け放つと、ひとりで風にあたる頬は暖かくもあり、じつとりと手に汗をにぎる。

六月終りのある日、テレビで梅雨明け宣言をしたと聞いた。

暑い夏本番になってきた。

湿度も高く、不快指数が高くなればなるほどたくさんの汗をかく。

クーラーなしの生活はもう無理だった。

扇風機の生あたたかい風が回ってるだけの部屋にはもういられない。

いつそショッピングにでも出かけて、涼しいお店でお茶を飲んだり、映画館にでも出かけて涼んで
いたいのが常だ。

みよ子は慌てて洗濯物を取り入れた。

強い日の光でパリツとしてる洗濯物はいかにも取り入れが遅すぎた様だ。

それでも日の光をたくさん浴びた洗濯物が好きだった。

私にとつて悪いことではない。

「あー、いいにおいだわ…。」

とその太陽の優しい香りに包まれて、幸福を感じていた。

家族の幸せは洗濯物で感じる。

母からは少し変わつてゐるね、と言われるが毎日する家事の中でも、洗濯を干すのが一番好きだろう。

その香りに包まれてる私は幸せだ。

みよ子は不思議な思いで考えることがあつた。生まれながらもつていた性質、きれいすぎ。いつもたくさん洗濯をして部屋もすっきりした感じで過ごしていた。

鼻歌を歌い、ゆつくりと洗濯物を畳む。

と、玄関のドアが開いた。

「ママ、ただいま。」

息を切らして、息子のマサミが戸を勢いよく開けて入ってくる。

今年、小学校一年生になつたばかりだ。

洗濯物をきれいに畳んでる中を、子供がドカドカとその中にくることも一度や二度ではなかつた。

子供というのはそういうもので、悪意というより、いらだたせて相手を怒らせてしまうのだろう。

「学校から、ダッシュで帰ってきてもう足もガクガクだ。」

マサミはひざに手を当て、後に一步よろめいた。

そのまま、黄色の学生帽を脱ぎすて、ランドセルを、それっ、つと玄関の脇に放り出す。

「年々暑さがひどくなるわ…。」

と洗面所からタオルを持って出てきた。タオルで汗をぬぐう。

「さあ、そんなに荷物を放ったりしないで…。」

マサミの顔をあきれて見た。

「行儀悪いわね…。早く手を洗ってきて。それからおやつにしようか。」

「はい。」

と今度は素直な返事で洗面所へ。

手を洗い、用意してあったシュークリームを一口かじる。へへっと笑い、あわててそばにあったジュースを飲む。

「ママ、僕ね、これから友達の家、遊びに行ってくるよ。」

と慌てて食べる。

早く遊びに行きたいのだろう。口の回りについてるクリームを手で取りながら、

「じゃあ行ってくるよ。」

いつもの様に、宿題もそこそこにマサミは私を尻目にさっさと外に飛び出していった。

小さな空間に一人置かれたみよ子は、取り入れてた洗濯物を畳み始める。

みよ子にとっては、何の変哲もない日常生活だった。

マサミの残したジュースとシュークリームに手を伸ばす。と、伸びをした。

食べかけのシュークリームをほおぼる。

流されるように生きてる私、こうやって過ごしていくのだろう。小さかったマサミも少し手が離れるようになり、変化する毎日だった。

マサミは反抗期とまではいかないが、わんぱくで元気がよかった。

洗濯物を片づけて一息つく。それから夕食作りへと取りかかる。

子供が学校から帰ってくるまでに、買い物に行つて用事をすませておいたのだ。

冷蔵庫を開けると、すぐに目にとまるのは、豆腐と納豆だ。

うちにはかかさずあるのは納豆だ。納豆ごはんに納豆卵やき、納豆お好みなどなど…バラエティに富んだメニューが多々あった。夫はどのメニューも好んでいた。

「さて、今日の夕食は納豆と肉じゃがにしましょうか…。」

コンロに水をかけて、まず豆腐の味噌汁を作り出す。

「今日も上手にできるかしら…」

味噌汁があるといつも喜ぶ夫だ。

だから毎晩かかさず作る。

文句の一つも言わないタクミさんは優しい人だった。

夫のタクミさんとは、もう十二年のつき合いだ。

結婚してから十二年だけど、つき合い始めてから合わせると十五年ぐらいになる。

いわゆる学生時代からの友達でつき合い、結婚に到ったパターンだった。

初めて話した時、ビビツときた人だった。

それぐらい今でも私はタクミさんの事が好きだ。

そろそろタクミさんが帰ってくる頃だ。営業部に入っている彼は毎日が忙しくて大抵帰宅するのが七時を過ぎていた。

時計を見ると六時過ぎだ。

「ただいま。」

ふり向くとタクミさんがいる。私は少しびびったりしたように、

「あら、今日は早いね。おかえりなさい。」

とかばんに手をかける。

かばんを手渡すと、ゆつくりとネクタイをほどく。

「今日は少し疲れたなあ…。おつ、今日の夕食は肉じゃがか…。」
上着を脱ぎ、ソファアの上に置く。

と卓上のおかずを見てうれしそうにした。

肉じゃがを見ては美味そうだ…、と連発して言う。

思わず手を伸ばしてつまみ食いをしている夫。それを見て、息子のマサミもかけ寄ってくる。

「パパ、ずるいよ。つまみ食いして!!」

と口を膨らした。あわてて席についた。

「あゝ、僕も早く食べたかった!!」

いい匂いがする。

しょうゆとダシの香りがした。

「おい、お前も食べてみるよ。ママの作った肉じゃがが上手いぞ!」

「マサミ、少しかね。」

とみよ子が言うのと、タクミが笑う。

はっはっは…。昔から喜怒哀楽が顔に出る人だ。タクミさんは顔いっぱい笑いだった。

「どうかしら…今日の味付?」